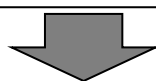


新たな家畜改良増殖目標（第11次）の検討状況について

－ 肉用牛 －

現状と課題

- ・和牛の脂肪交雑の改良は一定レベルまで到達する一方、消費者ニーズの多様化が進展しており、食味に関連する脂肪酸組成など新たな価値観が求められている。
- ・生産基盤の強化や食肉需要への対応のため、分娩間隔短縮などの繁殖性、飼料の利用性、枝肉重量や枝肉歩留りなど、更なる向上に取り組む必要。
- ・和牛の遺伝的多様性を確保し、和牛遺伝資源の適正な流通管理により、国内で活用していくことが重要。



新たな改良増殖目標(案)の策定に向けた主な方向性

【能力に関する目標】

① 産肉能力

- ・枝肉重量や歩留基準値など肉量に関する形質に加え、食味に関連する不飽和脂肪酸（オレイン酸等）含有量などに着目した種畜の選抜・利用。

② 繁殖性

- ・雌牛の発育状況や産次数等に配慮しつつ、ICT（情報通信技術）などの活用も含め個体の発情兆候や繁殖成績等を把握し、長期不受胎牛に対して繁殖・飼養管理を徹底。

③ 飼料利用性

- ・日齢枝肉重量（kg/day）の遺伝的能力向上を図るとともに、飼料利用性に係る余剰飼料摂取量等の指標化を引き続き検討。

【能力向上に資する取組】

① 改良手法

- ・ゲノミック評価については、産肉能力に係るフィールド情報の蓄積・分析等を進めるとともに、繁殖性や脂肪酸組成などの形質についても活用を推進。
- ・特長ある系統の維持・改良、遺伝資源の多様性を確保する観点から、系統情報とともにSNP情報（一塩基多型）も活用。

※SNP(Single Nucleotide Polymorphism)：一つの塩基配列の違いが、個体能力の違いを生じさせることがあり、これをSNP(一塩基多型)という。

② 飼養管理

- ・肥育期間の短縮については、増体性や不飽和脂肪酸含有量などの向上を図りつつ、経営収支のバランスの確認、流通・消費サイドの理解も得ながら取り組む必要。

③ その他

- ・家畜改良増殖法など関連法令等に基づき、和牛遺伝資源の適正な流通管理とともに、和牛遺伝資源の知的財産的価値を保護する必要。
- ・酪農経営との連携による効果的な和牛生産の拡大を推進。

※ 今後、継続して意見を聴取する事項等

- 種雄牛の能力に関する育種価の目標数値については、どの程度にするか更に検討が必要。